

経済学研究双書

近代経済学の反省

塩沢由典著

日本経済新聞社

塩 沢 由 典 (しおざわ・よしのり)

昭和18年 長野県に生まれる

昭和41年 京都大学理学部数学科卒業

現 在 大阪市立大学経済学部助教授

経済学研究双書

近代経済学の反省

昭和58年11月17日 1版1刷

著 者 塩 沢 由 典

© Yoshinori Shiozawa 1983

発行者 前 田 哲 司

発行所 日本経済新聞社

〒100 東京都千代田区大手町 1-9-5

電話 03-270-0251 振替 東京3-555

印刷 東光整版印刷・製本 牧製本

ISBN 4-532-07404-5

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めて下さい。

まえがき

「均衡」概念は近代経済学にとって対象の分析を進めるうえで認識論的障害となっている。われわれがこの概念（あるいはより正しくはこの範疇）を拒否し、その概念作用の呪縛から自己を意識的に離脱させる努力をしないかぎり、経済学が現在の理論的混迷をつきぬけることはできないであろう。

本書の論述は以上の主張につきている。もちろんこれは証明できることがらではない。わたしがここになしえたことは、「均衡」のような重要範疇につき無反省的な態度を取ることが、経済学にとっていかに重大な誤謬と視野のゆがみとをひきおこすか、理論的分析の諸相にわたって示唆することであった。

本書の鍵である「認識論的障害」の概念はもともとバシュラールのものである。かれは人々の思考を前科学の状態にとめおく心性一般にこの語を用いたが、科学の成立後においても援用可能であろう。いかなる概念系も、われわれの思考に一定の視野を与えることの反面として、対象の分析に特定の死角を作り出す。認識論的障害とは、この隠された部分が科学の発展を阻害するにいたったときの、当該の視野=暗視野を作り出す概念ないし概念系をいう。

本書は、各三節ずつからなる三つの章とそれに先立つ序説からなっている。

序説は本書の問題意識を開示したものであるが、このような議論になれない人は読みとばされてもかまわない。

第1章は「均衡」が認識論的障害であるゆえんを例証してある。第1節は、序説とあわせて本書の見取図をあたえる導入部であり、価格均衡を中心とする均衡概念の基本点を解説した。第2節では、ワルラスの一般均衡論の典型的かつ極限的な展開であるアロー=ドブルー模型について詳細な解釈を試みる。2.6項をのぞいて内在的な理解を目指しているので、一般均衡論に期待する人にとっても有益なはずである。推移均衡の簡単な例の検討から分離される「均衡」と「定常状態」とは、今まで混同されてきた二概念である。第3節はケインズ

と置塩信雄とを例として、「均衡」概念がかれらの理論構成をいかに制約するかを示した。

第2章は、分配の当・不当をめぐる議論を中心に、「均衡」概念がそこにどうからむかを論じてある。第4節では価格決定の理論が争われうるものであることを示し、第5節では主流である限界生産力説を批判する。第6節はこれに対して、限界生産力説出現の一契機でもあり、それと対立するところのマルクスの分配論をとりあげた。それが経済学という学問の避けえざる理論構造をもっとも発達した形で示しているからである。

第3章は、いささか方法論的であるが、「均衡」概念を拒否することから見えてくるべき経済学を占っている。第7節では経済学の問題関心のあり方を問い、第8節では「均衡」範疇に対抗すべき諸範疇を検討した。第9節では、需給の調整の場としてでなく需要を伝達・分割する場としての市場を考察し、新しい市場理論への手がかりをさぐった。

「均衡」概念が認識論的障害として働らいているのではないか。この漠然とした予感がわたしの心に根づいたのはほぼ10年以上前にさかのぼる。そのころのわたしは経済学を学びはじめて日もあさく、この学問の長い伝統をほとんど知ることなく、いくらかの教科書と専門雑誌とから拾い読みしながら、新しくみずから選びとった学問の現状にかぎりない不満と反感とをいだいていた。客観的にみれば、それは理由なき反撥であった。しかし、60年代末の情熱にとらえられたのちに、なんであれふたたび学問といえるものに接近した若く傲慢な精神にとって、既成の学問否定はむしろひとつの当為であった。だが、もちろん、はじめから不満の正体がつかめていたわけではない。漠然とした予感が明確なかたちを取りはじめるには、二方向への迂回が必要だった。

ひとつは当然のことながら、自分の出発点を記すべき経済学の探索であった。近代経済学の主流に不満をもつものは、一度はマルクスにもどる。わたしの最初の支点もマルクスだった。学生時代からマルクス主義を身近かなものにしてきたから、それは当然であった。ただ、わたしにはマルクス主義といわずマルクスそのものをも全的には一度も受け入れることができなかった。弁証法

論理が形式論理を否定できるとは、どうしても考えられなかったからである。したがって、わたしにマルクスとの再会を準備してくれたものは、マルクスをも合理的に読むことができるという主張をもったアルチュセールの仕事だった。そのころ、もしわたしが日本にいたとすれば、宇野弘蔵がかわりの導きをしてくれたであろう。

とにかく、わたしはマルクスの価値論と新古典派の価格論とを比較対照し、両者の差違を強調することから出発した。だが、価値論はやはりつまずきの石であった。わたしは価値と価格の二重生活になやみ、なんとかその両者を調和させようと長いこと努力した。1975年になお、わたしは長い(発表されなかった)試論をかいて、価値による価格の規定にかんし、重層的決定(surdétermination)というアルチュセールの範疇をもちい、なんとかそれを正当化しようとしていた。しばらくして、わたしはそのような努力がまちがいであると考えようになった。別の回路をへて知りあったスラッファは、マルクスの生産価格にあたるものをたんに価値あるいは価格と呼ぶところからかれの経済学を出発させており、対象分析の科学としてはそれだけで十分なのであった。

こう考えると、わたしの関心は自然にふたつの点に集中していった。第一は、マルクスにおいてなぜ価値概念が必要であり、それは一体どのような機能をはたしているかという疑問であった。本書第6節は、この疑問に対するわたしの到達した答えである。第二の問題は、新古典派とマルクスとの対立を労働価値説の有無にとらないとすると、いったい両者の基本的な争点は何であるかという疑問であった。すぐわかるのは、前者が価格の形成を説明しようとし、後者が正常な価格を仮定することから出発しているというちがいであった。わたしはまず、正常な価格の設定という立場がどのように正当化されるのか調べにかかった。非代替定理と通称され、本書で最小価格定理と呼ぶものの拡張にわたしが強い関心をよせたのはこうした事情による。

以上の思索に並行してわたしが行なった迂回は、科学史・科学論の立場から経済学の歴史を見なおすことだった。現状に不満をもち、新しい経済学の出現を望むものにとって、クーンのパラダイム論は自己の立場を正当化するかっこ

うの枠組みであった。だが、それは科学革命がパラダイムの転換であることを説得的に示しえていても、肝心の転換をいかに行なうかについてほとんど何も教えてはくれなかった。知的相対主義者はそれで満足できたであろう。わたしの性向はもうすこし過激であった。わたしはしだいに、アルチュセールを通して知っていた「認識論的障害」という考えに近づいていった。

そのころ、わたしの経済学にかんする知識は以前よりもうすこし広がっていた。不満の対象もそれにつれて広がった。

ケインズ経済学についていえば、わたしはまずケインズのあの晦渋をにくんだ。そしてクラインらの明解さをむしろよしとした。なぜなら、そこには見落とされているものへの手がかりが残されていたからである。45度線分析にあらわれる $Y=Y$ という恒等式が実際にはそうでないものを均衡という形式にはめこむために存在していることはすぐわかった。そこから有効需要原理の見なおしがわたしの中で始まった。『商品による商品の生産』しか読まなかったわたしは、スラッファ1926年の論文にふれたのはそのころであった。有効需要原理は企業水準で考えた方がよくわかると考えて、わたしは『経済セミナー』に「不況の理論とスラッファの原理」を書いた(1978年)。だが、これは不完全競争論におけるジョン・ロビンソンの需要函数をただ垂直に特定化する主張として受けとられた。不均衡論であれ、均衡の枠組みの内部にある。経済学における最大の認識論的障害は「均衡」だ。わたしが明確にこう意識するのはこれ以降である。

マルクス経済学への不満もこのような認識を助けた。古典派にも共通してマルクスは、価格の短期的変動を需要と供給の作用にゆだねた。この結果として、おおかたのマルクス経済学者は意識する・しないにかかわらず、すくなくとも短期の価格決定にかんするかぎり、需要供給均衡論を受けいれている。自意識としては新古典派にもっともするどく対立するはずのマルクス経済学が市場過程の分析という肝要な部分で新古典派の制圧下にある。この事実に気づいたとき、いわゆるイデオロギー批判や方法論批判から、わたしは一步踏み込む必要を感じた。問題はある方法論的立場から他の方法論的立場を批判すること

ではない。われわれの思考野を構成する諸概念にたいし異議申し立てを行なうことが必要なのである。

便利なことばはそれだけ危うい。思想の師であるふたりの先達からわたしの学んだ知恵のひとつがこれであった。どこにでも応用のきく便利なことばを五つか六つも仕入れれば、たとえたいした内容がなくとも、気の合った仲間のあいだでは、みずからつむぎだす言説に酔いしれることができる。経済学におけるもっとも便利なことばが「均衡」であることはいうまでもない。わたしはかねて自分に「均衡」、「需要」、「供給」ということばの使用を禁止してきた。前著『数理経済学の基礎』（朝倉書店、1981）はこのような方針によって書かれている。形式的にせよこの方針を守りえたことは、「均衡」が認識論的障害であるとの主張に一層のはずみを与えた。日本経済新聞社の内田勝晴氏から単行本の書き下しの話があったのは、前著の執筆によりやく目途がついた1979年の夏のことだった。

前著に約束した「より本格的な」分析にはすぐに進めそうもなかった。他方、前著では意図して一切の論争的な言及をさけたことで、わたしのなかに腹ふくる気持があった。一週間ほどしてわたしは、前著の姉妹篇として、「均衡」が認識論的障害であるとの主張を軸として『近代経済学の反省』という本を書く計画をたてた。その後、細部に変更はあったが、骨格は変わっていない。ただし、「需要」と「供給」の二概念は大いに躊躇したうえで復活させてある。

本書の表題にかんして、もっと勇まし気なものと勧めてくれる人があるが、わたしはこれで良いと思っている。通常もちいられる「批判」でなく、なぜ「反省」という語が選ばれているかについては、別の文脈のもとに本書第6節に触れているので参照してほしい（pp. 281-282）。「近代経済学」という語を本書では、1860-70年代にその大よその原形を形成し、基本的には現在にいたるまでその原形を保持してきた経済学の諸流派を総称するものとして使っている。したがって、この語の慣用とことなり、マルクス経済学が近代経済学のひとつに数えられている。これは新奇をてらうためでなく、この語の創始者の

ひとり杉本栄一の定義にしたがっているのである。

本書の草稿の大部分は京都大学経済研究所における月曜研究会で読まれ、批評をうけた。信州大学の青木達彦氏は第3節草稿を、京都大学の菊谷達弥氏は初校ゲラのすべてを読み、疑問を出してくれた。索引作成にあたっては井上美奈子氏の助力をえた。これらすべての人々と本書執筆の機会を与えてくれた日本経済新聞社出版局の方々に感謝する。校正中にロビンソンとスラッファがあいついで逝った。本書がふたりに負うところは大きい。冥福を祈る。

1983年10月

塩沢 由典

目 次

まえがき

序説 学 of 精神分析に向けて	3
0.1 「均衡」——経済学 of 中心観念	3
0.2 認識論的障害	6
0.3 観念 of 自己展開	10
0.4 資本主義社会 of 修辞学	13
0.5 正統化と非正統化	16
0.6 想像野 of 革新	20

第1章 均衡について

第1節 均衡 of 一般概念	29
1.1 価格均衡 of 諸前提	31
1.2 主体均衡 of いう枠組み	38
1.3 因果分析 of 否定としての均衡論	43
第2節 一般均衡理論	53
2.1 均衡 of 設計	54
2.2 時間地平 of 構造	60
2.3 均衡 of 時間的推移	67
2.4 補論——均衡推移 of 一例	76
2.5 一時均衡	87
2.6 批判的まとめ	92
第3節 有効需要 of 原理と均衡概念	101
3.1 ケインズ by による定義	103
3.2 均衡 of 集計	110
3.3 再定義 of 試み	118
3.4 一般理論 of 再構成（概要）	126

3.5 『一般理論』の二重の言説	136
3.6 総供給函数——置塩信雄の解釈	143

第2章 分配をめぐる

第4節 ふたつの価格理論	155
4.1 共通の仮定とみかけの対立	155
4.2 本源財価格をめぐる	162
4.3 代替的価格理論(概要)	168
4.4 ことばの対立をめぐる若干の注意	181
第5節 限界生産力説	185
5.1 生産物の完全分配	185
5.2 限界生産力説の含意	190
5.3 抽象的資本とその測定	194
5.4 異質資本と「代替原理」	201
5.5 一般均衡論の分配論的含意	207
第6節 マルクスの搾取理論	219
6.1 搾取論の基本型	219
6.2 混乱の整理・分析	230
6.3 二重の概念体系——ひとつの問題提起	243
6.4 形態とは何か——「形態」概念Ⅰ	253
6.5 社会意識としての「形態」——「形態」概念Ⅱ	266
6.6 説得的言説の構造	276

第3章 経済的なもの

第7節 経済学の定義について	291
7.1 「経済的」の二概念	291
7.2 物質主義定義たい希少性定義	293
7.3 形式的定義たい実体的定義	299
7.4 学問の定義はいかになされるか	311
第8節 経済的なものの存在論	325

8.1 合理的経済人	325
8.2 均衡と方法論的个人主義	332
8.3 過程と循環	338
第9節 市場について	363
9.1 収獲逡増と市場	364
9.2 個別取引過程	370
9.3 需要制約下の企業行動	382
9.4 投資対象としての市場	391
索 引	

近代経済学の反省

序説 学の精神分析にむけて

0.1 「均衡」——経済学の中心概念

いわゆる近代経済学は1870年代の限界革命にはじまっている。この経済学はさまざまな段階と学派とをふくみ、もっとも異質な諸理論の集合名詞にすぎないが、共通するひとつの概念がある。それが「均衡」である。

限界革命をになった三人の指導者——イギリスのジェヴォンズ、フランスのワルラス、オーストリアのメンガーのうち、ワルラスがもっとも偉大な改革者であることに異議をとねえる人は今日ではすくない。ワルラスこそが「一般均衡」の真の樹立者であり、その後の理論経済学をみちびいた赤い糸がかの概念にあることをみな知っているからである。しかし、「均衡」が経済学の中心かつ普遍的な用語になったのはそう古いことではない。ワルラス自身はパローネに指摘されるまで、自己の貢献に十分自覚的でなかった¹⁾。

「均衡」が経済学の中心概念として認識され、それと同時に、この概念にたいする反省的な考察があらわれるのは1930年代のこととおもわれる²⁾。1937年、おもに学生むけに経済学上留意すべき諸概念を解説したL.M.フレイザーは「均衡」について項目をたてて検討すべき必要をなお感じていない³⁾。このような空気のなかで、早くから「均衡」/「一般均衡」を自己の方法論上の基礎において考えようとした人にシュンペーターがいる。日本における数理経済学

1) ウィリアム・ジャッフェ『ワルラス経済学の誕生』安井琢磨・福岡正夫編訳、日本経済新聞社、1977, pp. 11-12.

2) L. Robbins, On a certain ambiguity in the conception of stationary equilibrium, *Economic Journal*, 1930, pp. 194-214 および R. Frisch, On the notion of equilibrium and disequilibrium, *Review of Economic Studies*, 1936, pp. 100-105 などがある。フリッシュはこの論文で「均衡」の一般的定義(再定義)をあたえようとしている。それは「方程式の解」というにほとんど等しい。

3) L. M. Fraser, *Economic Thought and Language, a critique of some fundamental economic concepts*, A. & C. Black, Ltd., London, 1937.

の最初の紹介者となった中山伊知郎は、1932年、若きシュンペーターの著作『理論経済学の本質と主要内容』（1908）によりつつ、純粋経済学の根柢を「均衡」にもとめている⁴⁾。

今日では、経済学はすべてを「均衡」で考えることになってしまっていて、それ以外の観念をたどって思考していた時代を想像することが困難になってしまった。たとえばアダム・スミスはあの経済学への探究において「均衡」(equilibrium)という語をただ一度使っているにすぎない。それも需要と供給の均衡という意味ではなく、輸出入の均斉のたとえとして使われている。スミスの価格理論のなかに今日われわれが「需要供給の法則」と名づける分析があるのは確かであるが、この名称自体はスミスになく、「需要と供給」という極文句すらかれは使っていない⁵⁾。スミスの均衡論、ケネーの均衡概念についてわれわれが語るのは自由であるが、かれらがそういう語彙と観念とをもつてものを考えなかったことは留意されなくてはならない⁶⁾。経済学がその成立以前から「均衡」のことばで考えてきたというのは誤った印象である。

おおくの学問の歴史において、新しい考え方は古い考え方を正しく理解するという信条が適用されている。このことはかつての自然科学において顕著であったが、最近ではいろいろな反省が試みられている。経済学は1870年代をへて、その用語体系、問題設定を大きくかえた。その断絶自身は「限界革命」の名において認識されながら、新しい枠組みのもとに古典経済学を解釈すること

4) シュンペーター『理論経済学の本質と主要内容』木村健康・安井琢磨訳、日本評論社、1936（原著は1908年刊）、中山伊知郎『数理経済学研究』岩波書店、1937。一部は『数理経済学方法論』の表題で1932年改造社経済学全集第5巻に発表された。

5) Adam Smith, *The Wealth of Nations*, ed. by Edwin Cannan, The Modern Library Edition, 1937, p. 456. 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫、第3巻、1965, p. 121. 「この学説は、もしその差額が釣りあっておれば両者いずれも損得なしであるが、もしそれがある程度一方にかたむけば、正確な均衡から傾斜する程度に比例して、両者のうちの一方は損をし他方は得をする、ということを想定しているのである。」訳文にはこれ以外にも「均衡」があらわれるが、他は balance あるいは proportion (-ed) の訳である。「需要と供給」という表現はキャンナン教授の欄外摘要にはあらわれるが、本文では「この金属の供給が需要とほとんど同一の割合で増加すれば」というように分離されている（岩波文庫、第二巻、1960, p. 72）。なお、この表現の起原については、P. D. Groenewegen, *A note on the origin of the phrase, "supply and demand"*, *Economic Journal*, 1973, pp. 505-509.

6) これに対して、スミス以前でも、ボアギヌベールの「均衡」、ジェイムズ・スチュアートの「均衡」について、ひとはより正統の権利をもって語りうるはずである。contents analysis が経済学史にも重要な手法でありえよう。

の不可能性と不当性については十分反省的であるとはいいいがたい。原典を読もうとする学生は毎年あらわれるが、ケネー、スミス、リカードをかれは現在にひきよせて読んでしまう。古典に特有のまわりくどい表現に時代へのなつかしさを覚えながら、かれは現在のでっとりばよい概念体系に翻訳して理解する。たしかにそれがほとんど唯一可能な読書であるのだが、それはけっしてわれわれ自身の反省へとひとを導かない。

「均衡」概念は、今日、かつてないほど重要である。「経済学が使われ考えられるときはいつでも、均衡は中心の組織概念である」からにはほかならないが、わたしは多分その理由を F. H. ハーンとは異なる意味において考えている⁷⁾。いかなるときにも、われわれが「均衡」の枠組みのなかで考え分析し対象にせまろうとするがゆえに、「均衡」は重要である。が、重要性の内容が正反対なのである。わたしにとって、「均衡」は、ある傾向性をもった思考を強要し、したがってそこからはずれる事象を見えなくさせている元凶である。ハーンにとって「均衡」は、たとえ不備の点があろうとも、理論のより高いところによじ登るべき手近なハシゴを用意するものである⁸⁾。どこにでも使いうるがゆえに、「均衡」はハーンにとって中心的である。問題があるとすれば、それはわれわれがまだ理論を十分拡張できていないからである。おなじ理由によってわたしは、「均衡」からの脱出の重要性と緊急性とを確認する。「均衡」の概念が現在の経済学において支配的であればあるだけ、その否定＝拒否という迂回をとおして理論の再構築がなされなければならない。

「均衡」批判の歴史は、この概念が経済学の中心概念となった時代にまでさかのぼる。すでに1932年、ミュルダールは『経済学説と政治的要素』において、「『均衡原則』は、かくて残念ながら、経済学上今日といえどもなお時に理論的説明から規範的思弁に堕しやうい危険な諸概念のひとつに属するのである」とのべている。ミュルダールは用語の重要性に気づいていたが、「均衡」を排除すべきひとつの用語とまでは考えていない⁹⁾。「均衡」についていくらかの体系

7) F. H. Hahn, *On the Notion of Equilibrium in Economics, an Inaugural Lecture*, Cambridge University Press, 1973, p. 1.

8) 同上, p. 41.

9) 山田雄三訳, 日本評論社, 1942, p. 74. 用語の重要性についての指摘はのちの著作にもくりかえされている。なお、ロビンソンとイートウェルはミュルダールが「均衡概念がはたすイデ